

自己知覚論の展開

—自己知覚・認知の過程、発生と発達、自己・母親・反映的自己イメージの影響—

杉 田 千鶴子

〔抄 録〕

自己を知覚・認知の再体制化の過程からとらえるための、理論的オーバービューを試みた。今日発展を続ける心理学の研究法は人間理解に向けて、どこまで進展しているか。また、その理論的接近の為のモデルを提供するきっかけとなる諸要因を自己の生成と、ダイナミックな精神作用の循環的開放系としての情報処理システムの機構としてとらえる試みから、統合していく。

これまでの知覚対象としての自己はもの信号系、ひと信号系として相互に作用し合い、環境への適応へと進化・発展してゆく中核的機構としてとらえることができる。自己・こころの存在は生命作用である。新生児から成人に至る自己の生成と発達の变化は、意識としての自己感の芽ばえから、秀れ自己の体制化された機構として機能してくる。初期の影響体としての母親認知との関連で論運びを試みた。

キーワード Development of the Theory of Self Perception and Cognition
Self-Image, Mother-Image, Reflected Self-Image
Self-Perceptual and Cognitive Process, and It's Formation and Development

自己、自我、自分、わたし、について、かつて多くの研究がなされてきた。自分について知る、自分がわかる、などの言葉は、自分、自己を対象化してとらえた自己に対する意識であり、自己に対する知識や認識でもある。これまで研究の多くで、欠落していたことは、自己を知覚対象としてとらえようとする場合、人は自分の生育歴、つまり自分の育ちの幼年期から現在に至るまでの時間的流れの中で、自分を回顧し、自分の位置を確証しようとする精神作用が含まれる筈であるにもかかわらず、この精神作用について、対象としての自己への推論・判断に焦点をあてる研究は少なかったと云えよう。また自己のもつ二面性、多面性についての考察において、異なる社会・文化では、その表出のされ方が異なることは、すでに多くの研究から読みとれる。それはパーソナリティの中核として自己をとらえた研究にも現われている。

Suls & Greenwald (1982) らは、知覚対象としての自己、自分についての知識は、人の所

属する社会集団との相互作用から生じる、と述べている。また人の性格、能力、意見についてわれわれ自身が描く概念は、その人自身に対する他者の反応、またそれらのかなり類似した他者との比較から育ってくる。この点については、Festinger（1957）の社会的比較理論からも、すでに示唆されていた。人の属する社会・集団という布地に人は織りこまれて、自己を形成していくと考えられる。

このように考えていくと、自己、自分という概念は、そのもつ諸相、その発生と形成・発達の時間的過程、そのもつ機能、ある状況での自分の行動の制御・統制、指針ともなる自己過程、パーソナリティの中核とも云うべき自我論からとらえた自我のスキーマからみる自我、超自我、など、多くのとらえ方ができる。また知覚論からくる知覚・認知対象としての自己として、認知科学における情報論的に考えるならば、知覚・認知対象の情報の処理過程として、さらに、脳科学から考える皮質内細胞の相互作用、ニューロンの活性化の過程としても、自己の機能の研究は発展しつつある。この機能の損傷が人の精神の働きの阻害要因となって現われるという諸種の臨床的所見とその研究、阻害要因のみならず、現象として出現する障害の予防・回復にみられる自己意識、などからも自己の存在が究め始められ臨床への応用も必要になっている（鹿取、2003）。

本題の自己の知覚・認知について考えを進めたい。知覚対象としての自己は、知覚対象を自分に向け、自分を知覚し知ることであり、またそこに含まれる過程、自分を知らうとすることである。当然それらを究めようとするとは、知覚対象を意識し、どのように見ようとするか、どのように自己をみたいのか、その時点でどう自分をみているのか、などの意味作用が含まれる。また新生児と、青年・成人とではとらえる側の自分、わたしの概念的成熟度も異っている。対象としての自己は、知覚する側の自己とのダイナミックな精神作用である。

知覚対象を「もの」系か、「ひと系」であるかによっても、見てとり方は異なる。おそらく認知的構成・構造とも云うべきものがその見かたに含まれていて、それは単に形、色をそのものの自体の存在としてとらえる以上に複雑な組織をもつ構造・機構の存在が想定される（鹿取、2003）。

I. 知覚対象としての自己

矢田部の提示した、知覚機能における消化の機能とは、知覚者が外界の所与の刺激を如何にして、みてとり、自己の中に消化させ、新しく補給した栄養として、既存の自己に付加し、新体制の自己に改変していくこと、つまりそこに新しい意味を付与しそれを自己の世界として意味づけていく過程とその成立を説明したものである。（柿崎、1900）Berutalanffy, L.（1967, 他）においても、「人はたえず世界と交渉しながら、自己を形成し発展する有機的開放系である。それはあらかじめ決められたプログラムに従って自己の内部だけで『情報を処理する』古

典的機械ではなく、プログラムそのものもおのずから変容され生成されうるような、学習するシステムである。」と述べていることが紹介されている。そこでは既成の体制としての枠組みを提示し、このシステムの作動のためのプログラムが「枠組み」と呼ばれたものである。外界からの所与の刺激を消化することによって、その所与が処理されると同時に、枠組みそれ自身も変容し、新しく既製の体制が成立する（以上柿崎, 1994, p10から引用）。

知覚における意味とは、知覚主体としての自己の改変であり、新体制としての認識の構造であるとも考えられる。さらに、柿崎も云うように、有機体全体としてのシステムも、互いに力動的に相互作用する、上・下位系の情報構造をなす。先の枠組みは、消化の動態を具体的に説明するための作動様式であり、自己の外界への関わり方でもある。この動態に関係する力動的・力学的法則性の現実的知見は、多くの問題文脈の対処の中で、観察、実験から見出される。ここには低次から高次のレベルの精神作用を含み、意味化の成立に向かう。知覚機能の他にも選択の機能も作用する。開放系としての人の情報処理システムは、継続する知覚・認知の体制の成立と変更を含むことから、そこに人の要求、記憶、知識体系としてのある状況での全体状況に依存する。このことはその人の人格形成の全過程をいまある状況が担っているといえる（柿崎, 1994, p7）。

既存体制としての枠組みは、時空的体制と運動的枠組み、文脈としての枠組み、知覚する人の要求といった全人的全組織的狀態を意味するシステム的な枠組み（ここでは情動系や記憶系との関係が問題にされる）、概念的・言語的枠組みがある。これらがある状況で意味や創造をつくり出すための既制体制の面体であり、枠組みである。どの枠組みをもちいるかによって人の知覚・認知的構成体が異って完結されることがわかる。概念的・言語的枠組みは、より高次の精神機能の体制の一側面である。

これらの一連の考えを通して柿崎の知覚論が成立した。そこではヘルソンの Adaptation 論にみられた順応水準とは異って、感覚的順応に加えて、判断を加えた認知説が暗に示唆されていた（知覚コロキウム記録集, 1995）。

柿崎の提示した知覚循環の図式（柿崎, 1993）では、生態的環境からの遠刺激として現前の事物・事象（O）を、近刺激として受容器に与えられた情報（S）を生態的環境とし、知覚者の内的構成体の媒介的機構ないし過程をIとし、この内部には知覚・認知機能としての前述の消化の機能を位置づけ、知覚・認知的反応 R（Sによって生じる効果を s, 効果器の反応を r とした）とするモデル図式を提唱した。さらに $RR \rightarrow S$ へとフィードバックされる知覚・認知的達成の為の加算的循環の系を示した。この図式に関する検討点は今後すすめられるであろうが、ここで知覚主体としての I の知覚・認知の機能から、I を媒介的機構ないし過程として、体制の組みから意味の生成へと結びつけようとしている。少なくとも消化の機能で説明される意味化、知覚・認知の媒介機構ないし過程が生体または有機体として精神作用を統合し変化させる「自己」であることを暗に示唆しているといえる。

それでは、このような少なくとも、かなりの程度に自己形成がなされた人とは別に、未分化な自己と云われる新生児にあって、自己意識はいつ、どのようにして、どんな自己の体制をつくっていくのか。これについては Piaget, J. の認知発達理論からは多くの示唆が得られる。

Ⅱ．発達研究における関係性の理論からのアプローチ

新生児の自己意識の形成については、コミュニケーション論から考えられる。Fogel, A. (1993) は人の発達を関係性からとらえようとした発達研究者である。この意味で私がここ10年余をかけて考えてきたことと一致点もかなりあると考え、本稿で彼の発達する自己 (self) の見方を整理することを試みた。

・ 関係の見方

自己は人間的であり、また科学的なものであり、哲学的で心理学的でもあり、文学的で技術論的でもあるが、その自己に対する関係性の貢献を述べることを目的としたものである人間の認識は基本的には、そして本来的には関係的なものである。プラトー、デカルトの客観性の伝統は現代の科学的方法論の基礎となっている。知覚と認知はそれらの内容、つまり世界が構成されている仕組みのコピーであるとも考えられた。認知の内容は人が世界について学習している文脈から生まれると信じられている。そのような客観主義者のモデルをコミュニケーション、自己、認識、文化の分離状態モデルとして言及している。いろいろな関係領域の研究者において不当な程客観的に考えられていることを調べるのがフォーゲルの目ざすところであった。云うまでもなく、認識も知覚も現実を写しだしているものではなく、世界の経験の仕方を反映している関係の過程なのである。スイスの認識論者や発達心理学者であるピアジュが指摘したように、初期の認知と知覚は直接的活動の手順で始まるとした。赤ちゃんは対象物が把握できるから、身体的感覚システムで知覚でき、意識や、形態、色から対象物を知る。従って知識や記憶が認知的にコード化されるのは、対象の抽象的な身体所有の表象としてでなく、赤ちゃんに組みこまれた認知の様式としてである。このように組みこまれた認知はどのようにして自己感や大方の抽象的思考の進行する中でさえも、基本的関係の具体化を決して逃がすことなく人間の認識の特徴的な過程に導かれるかを彼は描き出したかった。

心や自己感は自己と他の人の間の個人的関係性の形成の歴史的過程を現わすものとして理解されなくてはならない。心の働きや自己を知覚し理解する方法は、著しく個人の関係性と類似している。心の生命は想像的観点の間にある言語的ダイアログである。心の談話という観点は、討議する二人の異なる人の交わりにみる位置との類似性か、またはダンス、スポーツ、競技のような非言語的コミュニケーションに現われる個人の身体的に具体化した位置との類似性であると述べている。

・発達のとらえ方

発達の变化は生命をもつシステムの成分の間のコミュニケーション過程の作動し得るモデル、すなわちそのシステム内部の発達の变化のモデルである。発達のコミュニケーションや思考のモデルはここらやその起源を説明するのには不十分である。発達の生物学者は生長過程を調整する生長ホルモン、遺伝子をもって論じた。それらは新しい発達の形態の構造をうみ出すプロテインの生産に役立った。心理学者は心の発達の变化の通路を発見した。丁度パターンや組織をもち普遍的である発達はこれらのパターンの創造に対しての図式、プランまたはスキーマが存在することを意味してはいない。

システムティックな発達の变化の過程は、個人内部の生物学的成分の内部的相互作用の手段によって自己と環境の間に生じることが少数の発達心理学者によって指摘されてきた。システムティックな発達の变化は自己-環境のシステムの成分が相互作用するように、それら成分に課された相互の強制から現われると云う、共同的な調整 (co-regulation) という概念が使われた。これは連続的なコミュニケーション過程に付随するものとして生じ、不適切なコミュニケーションから生まれたメッセージの交換の結果から生じるのではない。これは潜在性と創造性によって再認され、発達の变化の基本的源でもあった。

・文化的見かた

文化とは関係的经验をすべて媒介する道具、メディア、コミュニケーションの習慣、信念のセットである。この考察は杉田 (2000, 2001) に一部提示したので省略する。

Ⅲ. 自己意識の発生・形成・発達

自己意識はどのようにして現われるか。またその時期はいつ頃か、について、これまでの研究者の論を述べる。

歴史的には James (1890) は、人の理解に対し人が内省し自分について語るのを第三者が知ることによって可能となると考えた。そこには人が自分を知り、思考する自己が含まれ、それを意識の流れとしてとらえることが人間を知ることにつながるとした。このことは人がある人の自己をみてとることになるので、知られる自己と分類された。この知られる自己について、その構成要素 (constituents)、自己の感知の仕方 (self-appreciation)、探究と保持 (self-seeking and self-preservation) に分けた。構成要素として、・物質的自己-自分の所持品、身体、・社会的的自己-周囲の人のとらえる自分についての認知、知識 (関係する周りの人の数だけ社会的自己は成立する)、・精神的自己 (spiritual Me) -概念的、心理的側面。この3要素を先の三つのとらえ方と交差させ、具体的な問題の内容が整理された。構造分析的接近をもって自己論を考えている。社会的自己は、関与する他者のとらえる自己を自分で認識し、それが他者認識をつくり、さらにその他者からのフィードバックから自己を認識する、といった社会的過程の

認知に触れている。後にミードのシンボリック相互作用論、クーリーの鏡映的自己論の展開となる。James の自己論は知る主体としての自己と、知る主体としての自己によって知られる自己に分け、それを含む全体的自己（totalself）を概念化している。知られる自己は経験される自己（empirical ego, 又は Me）、主体としての自分をわたし（I）、または純粹自我（pure ego）とした（中村編, 1990より）。

論究は省略するが Allport（1941）の自己論は行動主義心理学の心理学への影響に対する反論も含め、自己の構成だけでなく、認知的動機的側面を重視したものである。

Erikson（1968）は、Freud の精神分析の流れを組み、自我が自己を同定していく心理・社会的過程について、生涯発達の視点をもって自我をとらえた。すなわち、幼児期から老年期に至る自我の発達を 8 段階の人生周期としてとらえていることは、周知の通りである。そして各段階での同定の危機を超えて、上位の段階の自我へと確立・移行していくことを示した。

Rogers によって代表され現象学的自己論は社会的観点を多く含む。ここでは、知られる自己としての自己概念を、知る自己としての自己実現を人は想定し求めようとするとした。

Bandura（1973）に代表される社会的学習理論においては、強化説から代理学習としての観察学習の概念を導入し、自己統制、自己調節（self-regulation）、自己有効性（self-efficacy）を、自己の機能とした。ここでは自己そのものの関心は稀薄である。後に論が熟すにつれて、評価を含む認知過程の構造的分析に焦点が置かれるようになった。

Gergen K.J.（1994）によって自己のとらえ方の違いが以下に示された。現実的自己と構成概念（construct）としての自己、主体と客体としての自己の区別、構造（constructure）としての自己と過程としての自己、単一体として自己と複合体としての自己の区別、さらに時間・空間における連続的で安定した自己、単一自己としての統合過程も含むが複合体として自己を構成する要素が拡散する過程も自己の一断面だとも考えられる。

発達心理学や臨床的発達心理学的に自己は多くの研究者によって研究されてきた。一例としてマラーは子どもの自己は関係性の中で育ち、主体として自己と母親や養育者とのかわりが自己の発達を促進させたり妨害したりすることは当然考えられる。Ainsworth ら（1971）の母子分離・再会場面での 1 才児の行動をとらえた愛着実験によって子ども情緒、親への愛着の程度がとらえられた。そこでは親との分離・再会場面から子の特徴的行動分類をおこなった。回避や接近行動から子の親への関係性を 3 類型として、親子関係性は愛着形成、関係性、絆などの用語で慣習化した日常的言葉で表わされる。子の不安度等が評定されたが、親を知覚・認知対象としてはおさえてはいなかった。これよりもマラーは緩い制限の観察実験をおこない、適切な感受性、身体言語的コミュニケーション能力、養育方法選択の動機などの要因をとり出した。スターンの母子の相互の関わり合いの一般表象として「内的作業モデル」における意味化の問題として母親の人格特性が検討された。母親の自己表出場面と情報収集の方法をどのようにするかを課題とした。

マラーは最接近期危機を提出し、生後1-2ヶ月児の「自己と外界の区別のない」正常な自閉期、「自己の内界（あいまいなもの）への注意」を示す正常な共生期を経て自己の分化に至る。8-12ヶ月児の分離・個体化期が進行すると、子どもは再び母への接近を求めるようになる。これが再接近期である。母親への後追い、まつわりつき、とび出し、などの行動がこの期に現われる。やがて言語による象徴的接近が始まり、子の象徴遊びが始まる。ここで自己の世界を創造するようになる。まさしく精神力動的な自己の発達をとらえようとした自己発達の理論であると思う（齋藤，1993）。

発達初期の知覚と認知について（鹿取，2003）によれば、1960年代から研究法が開発され、1970年代に至る時期に著しく研究が発展してきたと云う。生体信号系ともの信号系が独立に、相互に作用しながら、知覚的体制化をつくってゆく。特に人の顔知覚への選好視は長い人類の進化の過程から形成されてきたものとも考えられる。人が諸種の感覚器官を通して、知覚対象を知覚・認知として、認知の体制化に至るまでに作用する多くの要因があり、知覚的枠組の中にとりこみ、新しい体制をつくり出すことを循環させ、乳児は発達していく。この情報処理システムに参与する心理的大脳生理学的理論の発達は、新しい研究法とともに発展しており、人の発達の仕組の解明へと開発・進展されている。それは単に心理学という学問領域を超えている。また脳（皮質・上皮）の損傷が人の障害をもたらしていることも多くわかり、その適切な訓練法などによって障害の回復に心理学からの貢献は大きくなってきている（鹿取，2003参照）。

IV. 自己・母親・反映的自己のイメージ構造

以上、こころと云われる精神作用が、もの信号系、ひと信号系の知覚・認知の体制化をもたらし、時間・空間的定位の中で人の情報処理システムの再体制化をおこない、環境と相互作用をする循環系として機能する存在である。対象の知覚者の中心核に働く媒介的機構ないし過程が精神であり、ここに「自己」の存在をみることができる。

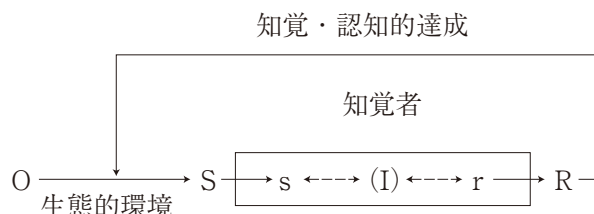


図1 知覚循環の基本図式

〔注〕 O：現前の事物・事象（遠刺激） S：受容器に与えられる情報（近刺激） R：知覚・認知的反応
s：Sによって生じる効果 r：効果器の反応 I：媒介的機構ないし過程

この図式から、外界刺激に対する知覚・認知的達成の循環系が読みとれ、その中核に知覚・認知の機能を果たす媒介的機構としての〔I〕（わたし、自己）が私見ではあるが据えられていると考えられる。RとO間を結ぶ循環系は時間軸を組みこんだ立体図式として再構成できるのではないかと思う。

さて、この図式から媒介過程としての自己は絶えず変化する力動的構成概念である。しかも既製の体制を置かれた状況に適合するよう再体制化をはかる際に認知の体制は安定をもたらすベクトルが機能するであろう。このベクトルが媒介的機能ないし過程（自己とも置き換え得るか）の要求や動機、さらに情意機能を含むと考えてよいのではないかと考える。

知覚対象としての自己は、確立した刺激として入力されるより、イメージとして何らかの知覚像をつくる。この知覚・認知対象が自己の置かれた状況的要因によって活性化されるとき、より成熟した自己像を形成してゆく。おそらく自己が知覚対象としての自己が活性化されると、そこには脱馴化が作用する。自己の活性化は自己感、自意識として既成体制の自己を揺るがせ、自己を感知させると考えられる。課題状況にぶつかりを感じたとき、自己は意識上にあがってくる。いわゆる近刺激に対する葛藤的自己がそこには存在するのである。その課題に対処し、それが解決されたとき、再び安定的で継続的自己の再体制をもたらすと考えてよいだろう。

〔研究の前提〕縦断的発達の一断面としての青年・成人期の自己に知覚対象としての母親の存在は、自己の形成に与える影響は少なからず大きいであろう。そこには現実存在する母イメージが過去の養育過程の表象として自己に組みこまれている。知覚対象としての自己は現実の対象のコピーでなく、表象化され、自己に価値、存在意義、生命の指針を与える影響要因として機能しているだろう。しかし影響の程度、影響の内容については個人差があると考えられる。

これまでの一連の研究で述べてきたことであるが、自己の再体制化を容易にするためのベクトルとして、私の研究（杉田、1969）の強制応諾事態での認知的不協和解消に“Volition”を導入すると、刺激媒体としての自己は覚醒され、知覚対象としての態度に変化が生じやすいことが明らかにされた。このことは自己認知の構造に変化が生じたことが示される。以下のBemの研究の妥当性を確証する試論と位置づけられる。Bemら（1965、1967、1970、1973）の自己知覚論は、自己の置かれたと同じ課題状況で観察的参加者としての他者、どのように課題状況をとらえ、解決をもたらすかの知覚・認知過程の推理の結果、課題に対する態度を変えたことが実証され、認知的不協和理論に対して反論を加えた。そこには他者の行為に対する推理過程が含まれ、対象の知覚・認知の再体制化が態度変化を生起させたと読みかえることができる。

自己意識や知覚対象としての自己は、関係性の中に織りこまれ発達していくことは、すでに幾多の研究からも明らかにされている。

私はイメージ形成において、母親からの反映的自己が、知覚対象としての自己イメージにどのように関わっているかをとらえるための研究を進めてきた。ここでは自己、反映的自己、母に対するイメージをSD法でとらえ、その関連性をみた。ここに示すのは、英国 ARM 大学（仮称）において2002年に私のおこなった研究をまとめたものである。構成体としての対象に対して、因子分析の結果、異なる構造がみい出された。まず、

〔結果〕〔自己イメージ〕については、第Ⅰ因子：元気がよい、自分中心的でない、友好的、よい性質をもつ、他人のことをまず考える、などの社会性因子（説明率51.9%中の分散比率12.41%を占める）。

第Ⅱ因子：細かいことに気をつかう、一生懸命である、まじめ、他人への気づかい、中途半端にしない、忍耐強い、など神経の細やかさ、まじめに働き、忍耐強い、などの因子で内向性を示す（分散比は11.86%を占める）。

第Ⅲ因子：勇敢で、ヴァイタリティがあり、外出好き、強い、活動的、決断力がある、辛棒強い、悪いことはしない、女性的でない、一人でいるのが嫌い、などにみられる、力強さを感じさせる外向性を示す因子である（分散比率は10.55%）。

第Ⅳ因子：意志の強さ、自分流に生きる、批判的、おしゃべりが好き、他者に頼らない、自分のペースで何事もやる、中庸的でない、独立的、ユニークさ、支配的、神経質な、おしゃべりが嫌い、一人立ちでやる、しゃべり好き、などにみられる他者に動じずに自分流に事を運ぶ、独立性の因子である（分散率は10.41%である）。

〔母親イメージ〕について因子分析の結果、5因子を抽出した。説明率は52.53%である。各分散率は16.60%、11.96%、9.03%、7.80%、6.84%である。第Ⅰ因子により大きく負荷していることがわかる。負荷の高い項目は、よい意志、元気、友好的、おしゃべり好き、公平さに強く気をつかう、精神力のある人、強い、強い意志のある、などにみられる意志の強さ、忍耐性、精神力の強さをもつ自己統制に関係する因子である。

第Ⅱ因子：悪いことをしない、いつも最善を尽す、一生懸命働く、忍耐強い、容易に感動しない、自我が強く、非難する、お天気や、他人のことをまず考える、支配的である、ゴシップを好まない、怒りっぽい、などにみられる、自我の強さ、感情制御に関係する因子である。

第Ⅲ因子：浪費しない、きびしさ、きれいずき、情緒性、勇敢さ、自己中心性、細かいことに気をつかう、決断力のある、活動的、まじめ、などに見られる行為の統制に関わる因子であり、日常的なしつけにも通じる。

第Ⅳ因子：気が若い、すぐに感情移入をする、偏見があり、女性性をもち、格式を重んじるように仕向ける、平凡さ、中庸さ、体裁を重んじる、中年女性のあつかましさ、決断のなさ、清潔さ、などにみられるような、母親のもつ特徴を批判的にとらえる因子である。

〔反映的自己イメージ〕について、因子分析の結果4因子を抽出した。説明率は45.45%であった。第Ⅰから第Ⅴ因子までの負荷量の分散率は、14.63%、11.21%、10.02%、9.58%であっ

た。第Ⅰ因子：自我求心性、強い、楽観的、元気がよい、頼りになる、批判的、仕事を中途半端にしない、前向きの姿勢をもち、公平さに気づかう、自分のペースで事を運ぶ、性質のよさ、他人の世話好き、一人で居るのを好まない、友好的、おしゃべりを好まない、精神力のある人、きれい好き、活動的、泣き虫でない、神経質でない、いつも最善をつくす、強い意志力をもつ、など性格のよい面をもった人として見られていると知覚している因子である。これは自分をよく見せようとする力が作用しているのか、親が自分の子を必要以上によくみていると考えているのかは不明である。

第Ⅱ因子：他人のことをまず考える、一生懸命働く、勇気がある、他者への配慮性をもち、気が若くない、おしゃべり好き、柔軟である、偏見があり、ゴシップ嫌い、情緒性がない、感動しない、他人の面倒見がよい、女性的、他者依存的でない、など他人の世話はするが情緒性、感動性に乏しい、と見られていると知覚している。

第Ⅲ因子：自分流に生きる、笑顔をみせない、さびしい、体裁を重んじたがる、バイタリティがある、ユニークである、中年女性のようなあつかましさ、ありふれた、独立したいと思う、など表出された外面的姿を思わせる因子である。

以上みてきたように、各知覚対象の構造の特徴をまとめてみると、そこには大きな違いが現われた。

自己知覚ではⅠ：社会性、Ⅱ：内向性、Ⅲ：外向性、の因子。

母知覚ではⅠ：意志、忍耐、精神力などをみてとる母親の自己統制的因子。

Ⅱ：決断、勇気、活動性など活力・力量因子でしつけにも関係するととれる行為の統制因子。

Ⅲ：感情制御因子。

Ⅳ：親への批判的因子。

反映的自己Ⅰ：よい性格のもち主である。

Ⅱ：他者の面倒をみる、情緒・感情・表現の乏しさ。

Ⅲ：自分流の生き方、格好をつける、ユニークさ、独立したがっている、など親の見方を推測して、自分はそうでない姿をフィードバックさせようとする形で自己呈示している、と推定できる。

このように、母親イメージ、反映的自己のイメージは自分を単に投射したイメージをつくりあげているのでなく、自己を再構成する過程としてとらえることができる。

〔考察と展望〕自己像は性格検査にみられる社会性、内向・外向性という次元で、きれいにまとまった構造をもつ。母親知覚においては3因子とも、親自身、自己、感情、行為などを統制する因子としてとらえられる。第Ⅳ因子については、親を批判的に知覚していることが明らかにみとれる。反映的自己の因子では、自分と親のとらえる自分とは距離があることをやや誇大的に示していることが窺える。3つの知覚対象の構造間に、特徴が顕著に現われ、構造に大きな違いが見られた。系列的に順次提示した知覚対象にみられた構造の違いは認知過程の変

化としてとらえられよう。さらに能動的に自己を呈示しようとする反映的自己の構造や、知覚対象の構成要素の違いがみられたことなどにより、意味的にダイナミックな認知過程が作用していると考えられた。拡散、または統合への自己のベクトルが各イメージを構成し、コード化をもたらすと仮定できる。また日米比較研究(杉田, 2004; 2005; Goetz & Sugita 2000; Roth, Goetz & Sugita 2006)の構造の違いも文化差として、今後検討を深める必要がある。

これらの子の母子関係性認知、関係性の中で成立している自己意識の構造とどのようにからみ合っているかの分析は他稿にゆだねることにしたい。これらの調査は英国の3つの大学でおこなわれたものである。今回とりあげたのは一大学のサンプル(N=83)を分析対象として提示したことを加えておく。自己の多面的構造体は幼少期からの表象化された自己の姿が浮き出されているので、同じ質問票をもちいた日米の研究結果との比較のために、幼少期から青年期に至る表象化された自己をもちいたが、本研究においてもこの自己と知覚対象のイメージ構造との関連をさらに明らかにし、知覚対象に対し、活動、判断する自己の情報処理の過程の理解に言及してゆければと考える。

〔文献〕

- Ainsworth, M. D. S. 1943 The development of infant-mother interaction among the Wganda. *In B. M. Foss (Ed.), Determinants of infant behavior, II. Methuen*, London.
- Ainsworth, M. D. S. 1969 Object relations, dependency, and attachment: a theoretical review of the infant-mother relationship. *Child Dev.* 40, pp. 969-1025.
- Ainsworth, M. D. S. and others 1971 Individual Differences in strange situation Behaviour of One yearolds. *In Schaffer H. R. and others: The origin of Human Social Relations*. Academic Press.
- 秋田宗平 1995 「知覚とは何か－柿崎と矢田部」, 第28回知覚コロキウム特別寄稿(討議資料メモ)。
- 秋田宗平 2002 色とところ 知覚の心理学, Kの会編: 心理学の方法, p. 119-140, ナカニシヤ出版会。
- Argyle M. and Henderson M. 1985 (2001 Revised) The Anatomy of Relationships and Rules and Skills to Manage them Successfully. Heireman London.
- アンダーウッド・G. 2000 (河内十郎監訳2004) オックスフォード心の科学ガイドブック, 岩波書店。
- Argyle M. (1987) 2001 The Psychology of Happiness. Routledge and Faylor & Frances Inc.
- Bahrik HP, Bahrik P. O, Wittlinger R. P 1975 Fifty years of memory for names and faces: A cross-sectional approach. *J. Exp Psychol* 104: pp. 54-75.
- Bem, D. J. 1965 An experimental analysis of self-persuasion. *Journal of self-persuasion. Journal of Experimental Social Psychology*, 1, pp. 199-218.
- Bem, D. J. 1967 Self-perception: An alternative interpretation of cognitive dissonance phenomena. *Psychological Review*, 74, pp. 183-200.
- Bem, D. J. 1972 Self-perception theory. *In L. Berkowitz (Ed.), Advances in experimental social psychology*, Vol. 6, New York, Academic Press.
- Bem, D. J. & McConnell, H. K. 1970 Testing the Self-perception explanation of dissonance phenomena: On the salience of the premanipulation attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 14, pp. 23-31.

- Kagibasi C. 1989 Socialization in Cross-cultural Perspective: A model of change. *In Gustav-Johoda et. dl., (Eds.): Cross-cultural perspectives, Nebraska Symposium on motivation, pp. 135-200.*
- 知覚コロキウム記録集 1995 「柿崎知覚論が訴えかけること」, 第28回知覚コロキウム記録集.
- Curtis D. Hardin and Terri D. Conley 2000 A Relational Approach to Cognition: Shared Experience and Relationship Affirmation in Social Cognition (appeared *In G. Moskowich (Ed.): Future direction in social cognition.*). *Relationship in Self Understanding.*
- ドイチェ, M. ジラード, H.B.1963 第11章 個人の判断に対する規範的影響および情報的影響の研究, カートライト・ザンダー編著（三陽二不二・佐々木馨訳編）グループ：ダイナミックス I 誠信書房, pp497-535)
- ドイッチェ・M. (杉田千鶴子訳) 1900 紛争解決の心理学, ミネルヴァ書房.
- Elizabeth Van Hook and E. Tory Higgins 1988 Self-Related Problem Beyond the Self-Concept: Motivational Consequences of Discrepant Self-Guides. *Journal of Personality and Social Psychology, Vol. 55, pp. 625-633.*
- Fogel A. 1993 Developing Through Relationships: Origin of Communication, Self, and Culture, Harvester Wheatsheat.
- 藤永保 2001 発達環境学へのいざない. 新曜社
- 船津衛 1980 シンボリック相互作用論・恒星社厚生閣.
- Gergen K. 1994 Realities and Relationships: Soundings in Social Construction. Harvard University Press.
- Goetz, D & Koos, E., Roth, R., and Sugita, C. 2003 Mother-Daughter Relationships in Austria, the United States, and Japan. *61 Annual Convention. Abstracts P21 International Council of Psychologists* Toronto.
- Goetz, Donna and Sugita, Chizuko 2003 Mother-Daughter Relationships in Japan and the United States of America. *In Anna Laura Comcenian and Uwe P. Gielen (Eds.): It's All About Relationships, P. 59-69. PABST Science Publisher.*
- Goetz, Donna and Sugita, Chizuko 2000 Mother-daughter relationships in Japan and The USA, *58th ICP convention, Proceedings, pp. 1-15* (accepted on September 20th 2000).
- Goetz, Donna and Sugita, Chizuko 2000 Mother-daughter Relationships in Japan and The USA, *58th ICP convention, Abst., pp. 187-188.* Toronto.
- ヘップ・D. O. (白井常他訳) 1987 『心について』, 紀伊国屋書店.
- 伊吹山太郎監修・秋田宗平・島久洋・杉田千鶴子編著 1989 心理学へのいざないーわたしとあなたの世界を理解するためにー ナカニシヤ.
- 池田進 2004 ヒトから人へー知的機能の一つの系譜, 関西大学出版部.
- James C. Anderson and David W. Gerbing 1988 Structural Equation Modeling in practice: A Review and Recommended Two-Step Approach. *Psychological Bulletin, Vol. 103, pp. 411-423.*
- 柿崎祐一 1993 心理学的知覚論序説, 培風館.
- 柿崎祐一 1994 “消化”の機能ー意味の知覚ー伊吹山太郎監・秋田宗平・島久洋・杉田千鶴子編著「現代の心理学ー研究の動向と展開」, 有斐閣.
- 鹿取廣人 2003 ことばの発達と認知の心理学, 東京大学出版会.
- Kevin D. 1995 Developmental Social Psychology, Blackwell Publishers Ltd. UK.
- 木内亜紀 1997 女子大生とその母親の相互対立・相互協調的自己観, 教育心理学研究, Vol. 45, pp. 183-191.
- 小高恵 1993 親子関係の年代推移, 教育心理学研究, Vol. 41, pp. 192-199.

- 小高恵 1994 親子間の認知構造の因子分析的研究, 心理学研究, Vol. 65, pp. 95-102.
- 松田惺 1977 人格発達における同一視分析の方法論的研究－同一視の指標に関する検討(2) 愛知教育
大学研究報告, Vol., pp. 87-102.
- 中村陽吉編 1990 自己過程の社会心理学, 東京大学出版会.
- 岡本夏木編著 1985, 1995 認識とことばの発達心理学. ミネルヴァ書房
- 岡本夏木 2005 幼児期－子どもは世界をどうつかむか－, 岩波新書.
- 大山正・秋田宗平編 1985 知覚工学, 応用心理学講座7.
- Ping Chung Cheung and Sing Lau 2001 A Multi-perspective multi-domain model of self-concept:
structure and sources of self-concept knowledge. *Asian Journal of Social Psychology*, Vol. 4, p. 1-24.
(Blackwell Publishers Ltd) The Asian Association of Social Psychology and the Japanese Group
Dynamics Association.
- Roth, R. Goetz, D., and Sugita, C. 2006 Students Describe Their Relationship To Their Parents in
Austria. In N. Dyan, E. Grothberg, R. Roth, C. Hiew and A. B. Bernardo (Eds.): Making a
Difference in the Life of Others. Proceedings of the 62nd Annual Convention. *International Council
of Psychologists*. Jinan, China.
- 佐伯胖 1978 イメージ化による知識と学習, 東洋館出版.
- 斎藤久美子 1993 子ども理解の方法と理論－縦断的観察研究を通して, 岡本夏木編: 新児童心理学講座,
p. 25-66, 金子書房.
- 桜井芳雄 1998 ニューロンから心をさぐる, 岩波科学ライブラリー 64.
- 杉田千鶴子 1964 認知的不協和解消における“Volition”の効果 日本心理学会発表論文
- 杉田千鶴子 1979 施設精薄児における遊戯治療集団の相互作用過程の分析, 昭和53年度科学研究費補助
金研究成果報告書概要: 発達障害児の遊戯治療における行動変容と治療的要因の分析, (代表・園原
太郎) p. 30-33, (佛教大学心理学研究所1979年3月刊).
- 杉田千鶴子 1979 施設精薄児の集団的遊戯療法の試みとその治療的要因の分析, 昭和53年度科学研究費
補助金研究成果報告書概要: 発達障害児の遊戯治療における行動変容と治療的要因の分析, p. 34-39,
佛教大学心理学研究所 (1979年3月刊).
- Sugita C. 1980 Analysis of Interpersonal Process in Group-play Therapy of the Residential Mental
Retarded XXII International Congress of Psychology Session: Long Symposium 21, Chairman:
J. P. Das (Canada) Organizer: H. D. Rösler (GDR), Co-Organizer: I Wald (Portland): “Development,
Diagnosis and Therapy of Mentally Retarded Children”. *Program p. 54 International Union of
Psychological Science. Leipzig*.
- Sugita C. 1992 Attitude Toward the Teaching Profession: Students who Take Teaching Courses and
Want to become School Teacher in the Near Future. In Motoaki H., Misumi J. and Wilpert B. (Eds.);
Social Educational and Clinical Psychology, *Proceedings of the 22nd International Congress of Applied
Psychology*, Vol. 3, p. 175, Laurence Erlbaum Association Ltd.
- Sugita C. and Shima H. 1992 Psychosocial Factors for Healthy Long Life Through Ways of Life and
Relationships Among the Uigur and Kazakh Peoples, The People's Republic of China. In Motoaki
H., Misumi J., Wilpert B. (Eds.); *Social Educational and Clinical Psychology, Proceedings of the 22nd
International Congress of Applied Psychology*, Vol. 301-302.
- Sugita C. and Akita M. 1995 Japanese mother's and Child's cognitive differences concerning
interpersonal relation in their family (1), *53rd Annual convention of International Council of*

psychologists, Abst., p. 88. Salem.

- 杉田千鶴子 1995 社会関係、協力と競争、集団過程、協調、リーダーシップ、他、10項目の分筆、岡本夏木・清水御代明・村井潤一監修；発達心理学事典、ミネルヴァ書房。
- 杉田千鶴子 1996 家族に見られる対人関係の形成と発達（1）－母・子間の母親認知差研究の発達に向けて－、佛教大学教育学部論文集、第7号、pp. 31-54.
- Sugita C. 1996 Japanese Mother's and Child's Cognitive Difference Concerning Interpersonal Relation in Their Family (2). *XXVI International Congress of Psychology. Montreal. And Proceedings of International Journal of Psychology, 1996, p.60.* International Union of Psychological Science.
- 杉田千鶴子 1998 「わたしと母親との関係態」の認知構造について 日本心理学会 第62回大会発表論文集、p. 109.
- 杉田千鶴子 1998 わたしと「母親との関係態認知」との関連 日本グループ・ダイナミックス学会 第46回大会発表論文集、pp. 92-93.
- 杉田千鶴子・真鍋えみ子 1998 家族に見られる対人関係の形成と発達（2）－老年期の母親イメージに関する考察－、佛教大学教育学部論文集、第9号、pp. 33-56.
- Sugita Chizuko 1999 Students' Cognitive Mother-image and Its Structure. *57th Convention of International Council of Psychologists, Abstracts., p. 21. (Salem)*
- 杉田千鶴子 1999 「父子関係態の認知構造」第63回日本心理学会大会発表論文集、p. 132.
- 杉田千鶴子 1999 7章 社会性の発達. 杉田千鶴子編著 改訂教育心理学、p. 204-218, 佛教大学通信教育部.
- 杉田千鶴子・島久洋・鳥山平三編著 1999 教えと育ちの心理学、ミネルヴァ書房.
- Sugita C. 2000 Cognitive Structure of Relations between Son and/or Daughter and parents in Young People and Adults. *XXVII International Congress of Psychology, Abstracts, and International Journal of Psychology, p. 60.*
- 杉田千鶴子 2000 青年・成人期の「家族」に対する意識、第64回日本心理学会大会発表論文集、p. 183 (S25).
- 杉田千鶴子 2000 家族にみられる対人関係の形成と発達（3）－青年期における自己と母子間関係態の“認知構造と次元”の考察を通して自己概念の社会性の意味を問う－、佛教大学教育学部論集、第11号、p. 19-30.
- 杉田千鶴子 2001 家族にみられる対人関係の形成と発達（4）－自己知覚と「親子関係態の認知構造」佛教大学教育学部論集、12号、pp. 35-54.
- 杉田千鶴子 2003 「こどもの遊び」pp.144-174. 第2章 幼児期の発達. 杉田千鶴子編著：改訂・児童心理学、佛教大学通信教育部.
- 杉田千鶴子 2003 「認知の発達と社会的行動」pp.236-256. 第3章 児童期の発達. 杉田千鶴子編著：改訂児童心理学、佛教大学通信教育部.
- 杉田千鶴子 2003 青年・成人期における自己知覚と認知的母・子関係性尺度の妥当性に関する考察、佛教大学教育学部論集、14巻、p. 25-42.
- 杉田千鶴子 2004 Mother-Daughter Relationships in Austria, the United States, and Japan. *The 61th Conference of International Council of Psychologists, Abstracts p. 21. Toronto. At Paper Session 21: Parents - Children Research in Different Culture.*
- 杉田千鶴子 2005 学界報告 佛教大学教育学部論集、15号、p. 157-158.
- 杉田千鶴子 2005 関係性の形成と発達に関する心理学的考察－認知的父子関係性が自己知覚に与える影

- 響について－, 佛教大学教育学部論集, 16号, p. 69-88.
- Susan Harter 1998 The Development of Self-Representations. In William Damon (Edition) & Nancy Eisenberg (Volume Editor); *Handbook of Child Psychology (Fifth Edition); Social, Emotional, and Personality Development, Vol. 3, pp. 553-618*. Damon Eisenberg.
- 園原太郎編 1980 認知の発達, 培風館.
- 塚本伸一 1997 子どもの自己感情とその自己統制の認知に関する発達的研究 心理学研究, Vol. 68, pp. 111-119.
- 浜口恵俊 1999 日本型システムのなかの(にんげん)－「関係体の存在論的検討を通して」第27回京都心理学セミナー(レジメ), pp. 1-5.
- Ross D. Parke and Raymond Buriel 1998 Socialization in the family: Ethnic and Ecological Perspective. In William Damon & Nancy Eisenberg (Eds.); *Handbook of Child Psychology, Fifth Edition: Social Emotional and Personality Development, pp. 463-553*, Chapter 8. John Wiley & Sons, Inc.
- W. Andrew Collins 1992 Parent's cognition and developmental changes in relationships during adolescence, In Ann V. McGillicuddy-Delisi, & other, (Eds.), *Parental belief systems, pp. 175-198*, Laurence Elbaum Assoc., Inc.
- Warrington EK Siberstein M. 1971 A questionnaire technique for investigation very long term memory, *J Exp Psychol*, 22: pp. 508-512.
- 渡邊洋子 1991 働妻健母, 原ひろ子他編「母性から次世代育成力へ」, pp. 95-99, 新曜社.
- 矢田部達郎 1950 心理学序説, 創元社.
- 山村賢明 1971 日本人と母, 東洋館.

〔付記〕

本稿は平成17年度佛教大学特別研究費による研究としてまとめられた。

(すぎた ちづこ 教育学科)
2006年10月19日受理